

地域に伝わる伝説や民話、文化財などを紹介

にしあいづ物語100選 ぞの100

奥川・弥生集落のいま、むかし

文：矢部 征男

奥川の弥生集落は飯豊山系南部の久良谷川沿いに位置する集落で、昭和21年(1946)から国策による開拓事業によって誕生した13戸の集落です。10戸が弥平四郎集落からの移転者で、ほか3戸は上流3kmほど先にあった「上官公村」と呼ばれた営林署関連村からの移転者でした。この地域の豊富な樺材を伐り出し、輸出する事業に従事していました。上官公村には10戸の作業員住宅や、事務所、倉庫、小学校があったといえます。

昭和21年から始められた弥生集落開拓事業は戦後の経済恐慌や凶作に伴う食糧不足などの救済事業でもありました。「昭和25年(1950)までに13戸の入植者、耕地525反、薪炭採草地等295反などの開拓事業が完了し、残るは小学校分校の建設、10町歩の開田事業だけとなった」と記録されています。

こうして誕生した弥生集落は、昭和47年(1972)4月、新聞紙上に「地図から置き忘れ」^{まぼろし}「幻の村」と大きく報道され、全国的に知られることになりました。「小学校分校や13戸の住宅、79人が住むほどの集落が地図から落ちた例は初めて(国土地理院担当者の話)」と大きな注目が集まったのです。

小学校弥生分校は昭和27年(1952)、集落内に新築され、昭和30年代(1955～1964)までは全校1クラスで児童数は18人がピークでした。昭和37年度(1962)から5～6年生は弥平四郎分校への徒歩通学となりました(冬期間は弥生分校を季節分校としていました)。通学道は村東の峠を越えて弥平四郎まで4kmほどもあり、途中には「おたすけ小屋」と呼ばれる避難所も設けられていました。先生と児童や住民とのつながりは格別強く、昭和34年(1959)に赴任された郡山市出身の若き先生は、この子どもたちをモデルに『マタギ少年記』を創作、滝平二郎氏の挿絵で少年文庫として全国出版されています。この先生と村民との交流は平成25年(2013)まで続いたといえます。

豊かな自然に恵まれた弥生集落も高齢化や転出傾向が進み、平成25年秋に関係者集合のもと「冬季間の閉村」を決定して「お別れ会」を行い、決意も新たにそれぞれの道へと進んでいます。

参考文献：岩橋義平『弥生集落』、『西会津町史・第5巻(下)』



今月の表紙

今月の表紙は、民芸品工房「野沢民芸品製作企業組合」が製作している干支張り子から。職人の皆さんは心を込め、ひとつひとつ手作業で作っていました。



編集後記

明けましておめでとうございます。令和8年、新しい年がスタートしました。

私の今年の抱負は、感謝の気持ちをお忘れないうことと健康第一であることです！

本年が皆さんにとって何事もウマくいくステキな1年になりますように、お祈りしています。(三留)

